

第3章

コラム編

児童生徒の成長を喜び合う関係に！ 保護者との連携



児童生徒の成長を願う気持ちは、保護者も教師も同じです。児童生徒の健やかな成長のためには、児童生徒を常に中心にして保護者と連携していくことが大切です。「通常の学級でよりよく学ぶには」という視点を共有し、どのような支援があればできるだろうかという「できる文脈」で対話することがポイントです。

1 空き時間を活用した宿題のリハーサル

ある小学校では、保護者の了承の下、休み時間や放課後の時間を一部活用して、宿題の設問のうち2～3問を教師と一緒に解いてから、持ち帰るようにしています。対象児童は、宿題のリハーサルに取り組むことで、「自分で宿題ができる」という実感をもてるようになりました。「自分でできるようになりたい」という意欲が高くなり、少しずつ自ら解き方を尋ねてくるが増え、効果的な取組となっています。

2 学校と家庭との協力体制から生まれる信頼関係

6月、ある小学校の1年生の児童の保護者から、平仮名が読めていないようだという電話相談を受けた担任は、管理職及び特支 Co に報告し、対応を検討しました。検討の結果、学校では、一か月間で平仮名をどの程度覚えられるか様子を見ることにしました。家庭でも絵と文字の平仮名カードを使った取組を継続して行ってもらいました。その間、連絡帳を通じて、担任と保護者とのこまめなやり取りを大事にしました。学校と家庭との協力体制の中で取組を続けた結果、一か月後、読める平仮名は16個から44個に増えました。その後、夏季休業中の個人面談においては、今後も児童の理解面が心配されることを伝え、心理検査を実施し、今後の支援を検討したいことを提案しました。これまでの対話で、学校と保護者との信頼関係を構築できていたため、前向きに支援について検討することができました。

3 学校(担任)と保護者とのつながり

ある高等学校では、合格者オリエンテーションの際に保護者からの個別相談を実施し、保護者の思いと願いを聴く取組を行っています。また、日頃から担任も保護者に連絡する際は、「今日は〇〇ができるようになりましたよ。」「頑張っていますよ。」と、よい面を常に伝えていきます。このようなつながりがあるため、保護者の理解や協力を得ることができています。

学校をバックアップ！ 関係機関との連携



「外部の専門家から、何かヒントをもらえたらいいな」と考える学校も多いと思います。その「何か」の部分は、非常に重要です。関係機関から、どのようなことに対して助言を得たいのかを焦点化すると、効果的に連携を図ることができます。



1 学校と専門機関をつなぐ市町村教育委員会の働き

専門機関との連携が必要な場合に、市町村教育委員会に専門機関とのパイプ役になってもらうことができます。

ある小学校では、保護者からの相談を受け、校内委員会での協議を経て、関係機関と連携して対応することになりました。管理職は、どのような関係機関と連携すると効果的か、町教育委員会の指導主事に相談しました。指導主事は、学校に専門機関（町内の児童発達相談センター）を紹介しました。後日、校長から保護者に、専門機関のことを伝えました。その結果、心理検査が実施され、児童の実態をより詳細に把握することができました。

検査結果については、保護者の了承を得て学校側も見せてもらうようにし、児童の支援へとつなぐことができました。

2 巡回相談による指導内容・方法の助言

気になる生徒について、巡回相談を利用することで、生徒の実態を客観的に知ることができます。また、生徒が必要とする支援の内容と方法について、専門的な立場から助言を受けることができます。

ある中学校では、提出物（英単語などの各教科の毎日の宿題）を期限内に出すことが難しい生徒への支援方法について、巡回相談を利用して相談することにしました。巡回相談では、期限を守ることが難しい要因の一つに、スケジュール管理の苦手さがあるため、「いつまでに・何を・どれくらいといった見通しをもたせることが大切である」という助言を受けました。そこで担任は、毎日の帰りの会で帰宅後にやるべきことを確認するなど、スケジュール管理に関する支援を始めました。課題を細分化し、小さな目標を設定することで、生徒は提出物を期限内に提出できるようになり、前向きに取り組めるようになりました。巡回相談での助言により、担任はスケジュール管理が個別の支援の一つであることについて、生徒はスケジュールリングの方法について理解することができました。

途切れのない支援を実現！ 異校種間の連携



障がいの有無にかかわらず、どの幼児児童生徒にとっても、卒園・卒業し、新たな学校や社会へ入学・入社していくことは、非常に緊張するものです。一人一人の幼児児童生徒の思いに寄り添い、支援を継続したり、発達の段階に応じて支援を変更・調整したりしていくことは、幼児児童生徒の健やかな成長を支えるものであると同時に、保護者との信頼関係の構築につながるものです。

「どのような様子か」という状態に加えて、「どのような支援が効果的か」といった支援の具体や経過を共有することが大切です。

1 10月から始める保幼小の連携

ある小学校では、10月末の新入児健診に主幹教諭、養護教諭が参加し、受付時から子供の様相観察を行います。そして、気になる子供については、町の人権部会において、保育園及び幼稚園から子供の実態のみならず、支援内容について情報を提供してもらっています。

2 児童の安心を保障する小中の連携

ある小学校では、小学校6年生担任と中学校の教職員とで、中学校入学予定者について情報の共有を行っています。中学校への入学に当たり不安がある児童には、校長、担任、本人、保護者で中学校の学校見学を行い、安心して中学校で過ごせるような取組を進めています。

3 将来を見据えた高大の連携

ある高等学校では、支援を要する生徒の将来（大学へ進学した後の学び）を考え、校内委員会での検討を十分に行い、保護者の了承を得て、進学先の大学へ生徒の状況を説明するなど、高大の連携を図っています。

4 中学校の校内研修会への参加を軸とした、校区内及び中高の連携

ある中学校校区では、校区内の小中学校の主幹教諭、研究主任が中心となり、それぞれの校内研修会の日程の一覧表を作成し、お互いの校内研修会への参加を定期的に行っています。その校区の中学校は、卒業生の多くが進学している県立高等学校及び私立高等学校の先生方にも、校内研修会への参加を呼び掛けています。

授業参観を通じて、児童生徒の実態や各校の取組を具体的に把握し、引継ぎや授業づくりに生かすことができました。また、授業整理会は、貴重な意見交流の場になり、有効な支援を共有することにつながりました。

困ったときこそ、前進のチャンス！ 校内の工夫



「なかなか時間がとれない」「学校全体として取り組むことが大変」など、取組を始めたものの、次の課題に直面している学校も多いと思います。そのようなときには、同僚に相談することで、よいアイデアがひらめく場合があります。そのためには、日頃からどのようなことでも相談できる、風通しのよい職員室づくりが大切です。

1 生徒の個人ファイルを、身近な場所に保管

ある中学校では、支援を要する生徒の情報について、「担任はよく理解しているが、職員間で共通理解が図れていない」「情報共有の時間がない」ということを解消するために、個別の指導計画等を含めた生徒の情報ファイルを職員室内のロッカーで保管するようにしました。そして、全教職員が、いつでも閲覧したり、新たな情報を加筆したりできるようにしました。この取組を始めたことで、これまで以上に生徒の情報共有が進みました。

(※カギ付きロッカーを設置するなど、個人情報の取扱いに留意しましょう。)

2 教科指導で学級の支持的風土を醸成 「国語科通信」の取組

ある中学校の国語科の先生は、教科指導を受け持っている学級において、全体的に自分の考えに自信をもてない生徒が多いことが気になっていました。そこで、同じ教科の先生に相談して始めたのが、生徒に配付する「国語科通信」の発行です。一年前から定期的に、生徒が授業中に書いた作品とそのよさをまとめ、発行しています。この取組を実践した先生は「始めたばかりですが、自信をもつ生徒が増えてきました」と、効果を実感していました。また、友達同士で作品のよさを認める姿もあり、学級の支持的風土を醸成することにつながりました。

国語科通信

いろは

○自分流「枕草子」、なかなか上手に書いている人が多かったです。そのなかでも、とても良かった作品を紹介します。

【テーマ】食べ物


春はたけのこ。冬が去った頃、春のおとずれを待っていたかのように、頭の先を出しているたけのこはいとをかし。揺ったとき、冬が寒かったのか、茶色の衣をたくさん身につけているのは、いとをかし。

夏はスイカ。やうやうと暑さが厳しくなるとき、母がスイカを切って持ってくるのは、いとよろし。夏の暑さを忘れてしまうほど、夢中になって食べる姿は、いとをかし。また、暑苦しいから楽しめるスイカはよし。

秋は焼きいも。少し寒く感じる頃、ほかほかの焼きいもはよろし。落ち葉を集めて焼くのもよろし。焼きいもを半分にすれば、満月のように黄色く輝くのは、あはれなり。

冬は鍋。寒くなれば、家族と食卓を囲み鍋をつつくのは、よろし。また、外の寒さを吹き飛ばすように、体がほかほかしてくる鍋はとてよろし。だが、私の具が兄に食べられていたのは、わるし。

「茶色の衣」という表現がいいね!



「国語科通信」一部抜粋

参考文献・参考ウェブサイト

- ・発達障害を含む障害のある幼児児童生徒に対する教育支援体制整備ガイドライン 文部科学省（H29）
- ・特別支援教育推進ガイド ～一人一人が輝く共生社会の実現を目指して～ 福岡県教育委員会（H30）
- ・（小学校・中学校・高等学校用）特別支援教育コーディネーターガイド 福岡県教育委員会（H30）
- ・人権教育研修会資料集 福岡県教育委員会（H30）
- ・そこが知りたい！大解説 インクルーシブ教育って？ 木舩 憲幸（2014）明治図書
- ・共生社会の時代の特別支援教育 第1巻 新しい特別支援教育 インクルーシブ教育の今とこれから 柘植雅義（2017）ぎょうせい
- ・共生社会の時代の特別支援教育 第2巻 学びを保障する指導と支援 全ての子供に配慮した学習指導 柘植雅義（2017）ぎょうせい
- ・共生社会の時代の特別支援教育 第3巻 連携とコンサルテーション 多様な子供を多様な人材で支援する 柘植雅義（2017）ぎょうせい
- ・通常学級のユニバーサルデザインと合理的配慮 阿部利彦編集（2016）金子書房
- ・児童心理 特集「自分の居場所」がない子（2017. 9）金子書房
- ・児童心理 特集 ふれあいのあるクラス（2015. 4）金子書房
- ・「特別支援教育指導資料第20集」群馬県総合教育センター（H20）
- ・特別支援教育のための校内支援体制ケースブックー校内組織を活用したチームアプローチー 秋田県総合教育センター（2016）
- ・通常の学級におけるユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり 福岡県教育センター（H27）
- ・インクルーシブ教育システムの構築に向けた特別支援教育の充実 ～合理的配慮提供の7 steps～ 福岡県教育センター（H29）
- ・保護者との信頼関係を高める教師のコミュニケーションスキルアップ 福岡県教育センター（H21）
- ・文部科学省 <http://www.mext.go.jp/>
- ・（独）国立特別支援教育総合研究所 <http://www.nise.go.jp/cms/>
- ・福岡県教育庁「義務教育課各種資料ページ」（特別支援教育関係資料）
http://gimu.fku.ed.jp/one_html3/pub/default.aspx?c_id=76

おわりに

小学校・中学校・高等学校においては、特別支援教育に関する校内研修が実施され、「ユニバーサルデザインの視点」や「合理的配慮」を授業の中に取り入れようとする取組が広がっています。

私たち特別支援教育チームは、「ユニバーサルデザインの視点」「合理的配慮」に関する過去の研究成果をさらに発展させることが求められ、そのためには、各学校の課題を把握する必要があります。児童生徒の個々の困難さや教育的ニーズの多様化への対応、困難さや必要な支援に対する本人・保護者と学校側との認識の違い、校内委員会等を中心とした校内組織や関係機関との連携の在り方など、学校における課題は多岐に渡っています。これらの課題に対応する研究成果が求められました。

小学校・中学校・高等学校の通常の学級における全ての児童生徒の学びを支えるためには、授業の充実が欠かせません。そのために必要な要素とは何かを求め、3つの要素に整理しました。本人・保護者の意思表示から始まる「合理的配慮」に加え、「適切と思われる配慮」を新たに提案しています。このことで、各学校では支援を要する児童生徒に対して、主体的に配慮提供しやすくなると考えます。また、「学級の支持的風土」の醸成として、居心地のよい環境づくりを提案しています。これらに、「ユニバーサルデザインの視点」を含めた3つの要素については、「特別」ではなく、「当たり前」として、各学校で取り入れていただくことを強く願っています。

また、学校全体として授業の充実に取り組むために、校内委員会等との協働、保護者との連携、関係機関との連携が求められます。会議の時間は限られ、様々な業務を抱える学校現場で、実効性のある組織的な動きを検討し、授業との関連で整理し提案しています。組織的な対応は、3つの要素を取り入れた授業を一貫性・継続性・発展性のあるものにすると考えます。各学校の組織体制や運営状況に応じて、役立てていただくことを強く願っています。

本調査研究の成果物として、本書の内容を短時間で研修できる「校内研修スライド」を作成しました。本書と併せて御活用いただけると幸いです。

最後になりましたが、貴重な御指導、御助言を賜りました福岡教育大学 藤金倫徳教授をはじめ、調査に御協力いただきました各調査研究協力校の校長先生並びに諸先生方に、心から厚く御礼申し上げます。

福岡県教育センター調査研究特別支援教育チーム

調査研究協力員

平成29・30年度

福岡教育大学 特別支援教育講座 教授 藤金 倫徳

調査研究協力校

平成29・30年度

苅田町立苅田小学校	苅田町立馬場小学校
苅田町立南原小学校	苅田町立与原小学校
苅田町立片島小学校	苅田町立白川小学校
苅田町立苅田中学校	苅田町立新津中学校
福岡県立博多青松高等学校	福岡県立東鷹高等学校

福岡県教育センター 調査研究 特別支援教育チーム

平成29年度

特別支援教育部長	菊池 修			
主任指導主事総括	八田 信人	葉玉 千賀子		
主任指導主事	島津 千恵子	富重 英明		
指導主事	立川 嘉彦	井手 久美	古賀 弘行	田中 晃詞
	野中 昭秀	江口 将生	花田 将明	堀 修二

平成30年度

特別支援教育部長	太田 信			
主任指導主事総括	八田 信人	市場 敏彦		
主任指導主事	内本 郁美	山下 博之	江口 将生	
指導主事	鳥巢 将之	井手 久美	瀧口 博章	百留 裕幸
	藤岡 太郎	佐藤 美和子	堤 久幸	宮城 亜樹
	藤木 雄一郎	相浦 愛子		

福岡県教育センター 研究紀要 No. 203

インクルーシブ教育システムの構築に向けた通常の学級における学びを支える方途

小中高 学びを支える3つの要素

平成 31 年 3 月発行

福岡県教育センター

〒811-2401

福岡県糟屋郡篠栗町高田 2 6 8

TEL 092-947-2409 FAX 092-947-8082

URL <http://www.educ.pref.fukuoka.jp>